

## 団子童子の田うなえの話

むかしむかし、上柱田村に、やはり病気がまんえんし、沢山の村人だちが高い熱を出したり、下痢をしたりして、死ぬ人々が沢山ありました。このままでは、田畑の仕事がおくれて、お米もとれないのではないかと心配しました。そこで村人は、鹿島神社の神主様の処へ行つて「どうしたら、よかんべーかー」とたずねました。神主様は天をあおぎ見ながらしばらく考えておりましたが「キナ粉団子をつくって、自分の入口のところに紙につつんでおいてみる！この団子があくる朝、なくなっていればその家の家族の病気は治るぞ」と教えてくれましたから、村人は皆んなそのとおりに実行をしました。

ところが、三十六軒の家の団子が消えてなくなりました。団子のなくなった家の家族の熱もさがり、下痢も止まり、病気もだんだん快方に向いました。

そればかりではありません。ある夜、見なれない男が、戸口にあらわれましてこう言いました。「お団子どうもあ

りがとう。とてもおいしかったですよ。お礼に田うなえを手伝ってあげましょう！」と云つてたちざりました。

四、五日すぎて、田んぼへ行つて見ると、自分の家の田んぼが綺麗にうなわれているではありませんか「これは一体どうしたことなのだ。一体、これは誰がうなったのだろう！」「さて四、五日前に来たあの見なれない若い男なのだろうか。頬かぶりしていたから誰だかよくわからなかったが、あの若い男は一体誰だったのだろうか」と、不思議に思つて、また、鹿島神社の神主様におたずねしました。

神主様はしばらく天をあおぎ、じーっと天を見つめていました。「これは、おそらく前山の雨降山の鹿島神社の神様のお仕い童子どうじの三十六童子どうじが、お前さんがたの困つている姿を見られ気の毒に思い、やってくれたに相違ない。きっとそれに相違ない」と、言いました。鹿島様には、こんがら童子どうじ、せいたか童子等どうじの三十六人の童子どうじがお仕いをしていて、神社をお参りする人々の困つていることを、よく調べていてと、救ってくれる大変ありがたい神様なのだ、と、神主様は教えてくれました。